オールドメディア —— 高山邦男

先日、あるパーティーでお会いした藤原龍一郎さんから、書店では歌集が平積みされているのに、歌壇ではそうした熱がない。オールドメディア化しているのではないかとというような話を伺った。その後、このオールドメディアという言葉が胸に突き刺さり、あれこれ考えている。

テレビ、新聞などのいわゆる従来のメディアからしか情報を得ていない人にとっては、東京都知事選における石丸伸二氏の躍進、斎藤元彦兵庫県知事の再選は何が起こったのかよく分からぬ衝撃的な出来事だった。これを機に従来のマスコミをオールドメディアと批判的な意味合いを含んで呼ぶ言葉がクローズアップされている。実際、新聞の発行部数はがた減りし、書籍も売れなくなつて本屋さんほとんど減っている。従来の社会環境が激変し、権威の威光は失われ、SNSなどに投稿される有象無象の情報に右往左往しながら社会が進んでいるように見える。当然ながらこの潮流は歌壇にも少なからぬ危機をもたらしている。折しも長年歌壇を導いてきた総合誌の一つである「短歌研究」が隔月発行になるといふ。短歌ブームと言われる現象の一方で歌壇の衰退は確実に進んでいるようだ。とは言え、どうするべきかとか、こうしなければならぬというような大それたアイディアを持つていない訳ではない。ただ、どういう現状があり、どういう問題が生じているのか、という事を少し考えてみたい。

総合誌に掲載されている短歌作品をみると、おおよそ結社に所属している歌人の作品で、それも満遍なく各結社が取り上げられているように見える。また、各結社の広告も載せられていて、総合誌は基本的に結社に所属している歌人に向けて編集されているのではないかと考えられる。2024年の5+6月号の「短歌研究」では「300歌人の新作作品集」と題して300人の歌人の歌が掲載されている。この300人は優れた歌人だとは思いますが、各結社に配慮した上で、歌壇の序列的なものを意識して選出しているように見える。この号は結構売れたそうだが、そもそもその抛り所の結社の会員が減り続けている。「日本歌人クラブ」の令和六年の年齢構成の資料では、七十歳以上が八十パーセントで七十歳未満が二十パーセントとなっていて、かなりショッキングな数字だ。必ずしも全ての結社に当てはまるものではないだろうが、全体的な傾向としてはこれに沿っているのではないだろうか。このままでは誰もやる人がいなくなつて消滅した旧派和歌歌壇のように消えて行ってしまうかもしれない。

ただ、作歌する人に結社という場が重要である事は変わらない。ネット歌会サイト「うたの日」は十年余り前から始まり毎日開催している歌会で三桁の人数を集めている。ここに参加しているTon*という歌人は塔という結社にも参加している。また、「心の花」二月号長信短信における深尾早央里のネット歌壇と結社の分断についての感覚を興味深く読んだ。「私は心の花に入つて成長したので、結社って楽しいよとお知らせしたくなりまして。」と述べていて、ネット歌会にはない結社の魅力を伝えるためには会員一人一人の力が大切なのだという感想を持った。